

平成 22 年 6 月 1 日現在

研究種目：若手研究（スタートアップ）

研究期間：2008 ～ 2009

課題番号：20820031

研究課題名（和文）

「中国化」の観点からの日本近現代史の再構築：「集団」と「物語」を焦点に

研究課題名（英文）

Rewriting Modern Japanese History under the Concept of Chinaization

研究代表者

與那覇 潤 (YONAHA Jun)

愛知県立大学・日本文化学部・准教授

研究者番号：50468237

研究成果の概要（和文）：

中世、近代、現代に「中国化」の三つのピークを見出す形で、日本の通史像を新しく書き直す試みを行った。また、そのような歴史観に基づいて日本文化史を書き直す実践として、小津安二郎の作品を中心とする映画史の語りを改定した。

研究成果の概要（英文）：

The whole narrative of Japanese history was rewritten with the new concept, which enables us to find three moments of “Chinaization”; in medieval, modern, and contemporary Japan. One of the world-famous symbols of the “Traditional Japanese Culture”, Ozu Yasujiro’s films were also reoriented under that narrative.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2008年度	970,000	291,000	1,261,000
2009年度	880,000	264,000	1,144,000
年度			
年度			
年度			
総計	1,850,000	555,000	2,405,000

研究分野：人文学・日本近現代史

科研費の分科・細目：史学・史学一般

キーワード：

日本史・中国史・近代史・歴史認識・メタヒストリー・メディア・映画・小津安二郎

1. 研究開始当初の背景

(1) 研究代表者による着想の経緯

研究代表者は、卒業論文で近代日本の学問史における「人種」観念の変容を、修士論文で日琉関係において「人種」や「民族」といったアイデンティティ概念が果たした（もし

くは、果たさなかった）役割を検討して以来、一貫して日本社会における「集団」の意義について、東アジアの歴史的な文脈と、近代における西洋主導のグローバリゼーションの流れの中に位置づけることを目的に、研究を行ってきた。そのため、学術振興会特別研究員（DC1）としては、人種や民族のイメージに

において「血縁」という要素が占めた位置について、日本・琉球・中国それぞれの歴史と社会から比較考察する作業を行い、さらに学術振興会特別研究員（PD）となって以降は、そこで得られた知見を米国史におけるレイシズム論と対照することで、よりグローバルな世界史像の中で捉えなおすことを試みている。その結果として、国是としての「普遍的理念」を欠いたまま、単にナショナルな（＝内向きの）論理の延長線上で国土を拡張していったところに「近代日本帝国」の特徴があり、そのことが戦前期の「帝国」統治のあり方に独自の歪みを与えただけでなく、「国境」を越えたレベルでの正統性がひととき要求される現代世界への不適合にもつながっているのではないかと考えるに至った。

換言すれば、日本は各種の中間集団を経由して「国家」という単位に万事を集約させていくという、近代国民国家のシステムに過剰に適応した社会であり、そのことがグローバル化の進展に伴い、「国家」というユニットだけで統一的に生活世界のあらゆる側面を管轄することの困難さが露呈してきた現在の世界においては、逆に不適応を招いているように思われる。この点で、前近代以来、思想における普遍性への志向や、国家の役割の相対的な小ささ、社会の流動性および越境性という特徴において、日本とは好対照をなす中国社会との対比のもとに、日本近現代史の全体像を再構築することが、自身の研究の一層の発展につながると考え、この研究課題を構想した。

(2) 研究開始時の先行研究状況

このように、「中国」との対比において日本の近代を捉え返す歴史観は、政治思想史の分野では新奇ではなく、むしろ近年の研究動向に則したものであった。1980年代以降、朱子学を「徳川幕藩体制を正統化する体制教学」と見る旧来の歴史観が実証的に反駁され、90年代には「理」や「天」といった概念の普遍性を媒介として、むしろ儒学思想が西洋思想の受容や近代化の触媒として機能した側面に焦点が当てられた。一方、民衆思想史でも、近世後半の市場経済化に伴って民衆に浸透した儒教的通俗道徳が、逆にそれらを守らない支配者や富裕層に対する批判意識をも生み出し、従来の体制内抗議としての「一揆」の枠を超えた、中国の農民反乱にも通じる「世直し」運動の契機となったことが指摘されて久しい。このような観点からすれば、將軍を廃して天皇の下に権威と権力を一体化し、教育勅語をはじめとするイデオロギーによってその統治を道徳化し、世襲的武家官僚制を解体して高等文官試験を導入した明治維新は、「西洋化」であると同時に「中国化」でもあったと把握することができる。

本研究はこれらの視角を、狭義の思想のみならず、政治体制・経済システム・民衆運動・文化交流などの諸相の分析においても拡張することで、「中国化」という観点によって中世から現在に至る、日本社会全体のトータル・ヒストリーの書き直しが可能になることを、示そうと試みたものであったといえる。

2. 研究の目的

日本社会の歴史、特に近現代の歴史を「中国化」とそれへの反動という新しい枠組みの下で、トータルに分析する視座を確立することを、最大の目標とした。ここでいう「中国化」とは、直接に中国を目標としているか否かにかかわらず、結果として、中国近世（宋代以降）で成立したような国家・社会のあり方に近似した方向へと、日本社会が変容していくことを指す。本研究がいうところの「中国（的）な社会」とは、端的に要約すれば、近世中国において成立した、「可能な限り固定した集団を作らず、資本や人員の流動性を最大限に高める一方で、普遍主義的な理念に沿った政治の道徳化と、行政権力の一元化によって、システムの暴走をコントロールしようとする社会」のことである。

具体的には、明治維新以降の日本近現代史を扱う先行研究の諸業績を、「中国化」という観点の下に再構成するとともに、近現代の日本人の多くが共有してきた歴史物語における、「中国的」な要素の消長とそれに対する同時代の評価について、通時的な概観を得ることを目的とした。

3. 研究の方法

「中国化」と「反・中国化」のモメントが激しく交錯した日本近現代史の実体について、同時代の社会を生きた人々がいかに物語化していた（いる）のかについて、(1) 文献テキストと (2) 映像資料の両面から接近、分析した。

(1) 文献研究

「集団の有無」という視角の下に、これまでの日中比較社会論の蓄積を再構成する。日中両社会の最大の相違は、日本が「村社会」に代表される、メンバーシップが長期にわたって固定した、安定的なコミュニティの連合体として成立しているのに対し、中国社会がそのような共同体を欠き、むしろ個人単位での可変的・流動的なネットワークによって組織されている点にあるからである。歴史研究のみならず社会学や人類学の議論をも参照し、特にしばしば指摘されてきた日本の「イエ」と中国の「血縁」という親族原理の相違について、この観点から再検討した。

(2) 映像研究

戦前・戦中・戦後を通じて制作された日本映画（例えば「家」を主題として製作され続けた小津安二郎監督の諸作品）における「歴史」の語り方や「集団」の表象の解析を通じて、同時代の社会を生きた人々の感性を、より具体的なイメージをもって明らかにする作業を行った。

4. 研究成果

(1) 2008 年度

同年度は、主として日本史上・東洋史上の重要な先行研究の整理に基づき、日本列島で展開した歴史の全体像を「中国化」という切り口の下に再構成し、その中で「近現代」に新たな位置づけをあたえるという、理論的作業を行った。その成果は、「中国化論序説——日本近現代史への一解釈」として、『愛知県立大学文学部論集』57号（日本文化学科編11号）に公表したが、その概要を示せば、日本史は「源平合戦から南北朝にかけての中世前期」・「幕末の動乱から明治維新を経て立憲制が確立するまでの19世紀」・「冷戦終焉および55年体制崩壊後の21世紀への転換期」の三次に渡る「中国化」の大波と、それに対する反動の繰り返しとして描くことができる、ということである。これによって、歴史上存在した様々な文明システム・世界システムの興亡から、今日のグローバリゼーションに至るまでを全地球大の視野で把握し、日本列島の歴史を真の意味で「脱西洋中心主義化」されたグローバル・ヒストリーの一部として再定義するための、座標軸を得ることが可能となった。

(2) 2009 年度

同年度の研究成果は主として二系統に分かれる。ひとつは、①日中両国の社会を対照するためのマクロヒストリー的、政治理論的な考察であり、もうひとつは、②「中国化」の観点から既存の日本史叙述、日本文化論の記述を刷新していくための、具体的な事例研究である。

①前者については、九州大学の「アジア市民社会公開シンポジウム」での報告と討論を経て、清朝中国と徳川日本の体制を、それぞれに完結した独自の「公共圏」とみなし、両者の歴史的な異同と、今日的な意味とについて活字化した論考を、次年度に同大学の紀要より公刊することが決定している（原稿入稿済）。20世紀前半の国民国家体制やケインズ政策が近世日本の公共圏、20世紀後半以降のグローバリズムや新自由主義が近世中国の公共圏の延長線上に位置づけられる一方、政治と道徳の未分離に伴う多元主義的公共観

の欠如（一元的な正義論の信奉）という点では両者が一致することを示した。

②後者については、文化史上でしばしば「日本的なもの」の象徴とされる小津安二郎監督の映画作品について、「植民地」や「中国」の視野から眺めることで、まったくその解釈が一変し、かつ既存の昭和史叙述の刷新にも有益な示唆が得られることを示した。既に所属学科の紀要に論文一点を発表したほか、名古屋歴史科学研究会での報告を基に、次年度に雑誌論文一点・論文集（共著）への寄稿論文一点を公刊の後（ともに入稿済）、単独の著作としてまとめる予定である。

また、直接に本研究費の支援を受けたものではないため次欄には記載しなかったが、本年度に刊行した単著『翻訳の政治学——近代東アジア世界の形成と日琉関係の変容』（岩波書店、2009年12月）でも、部分的に本研究と重なる理論枠組や歴史叙述の提示を試み、広報上の成果を挙げた。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 5 件）

①與那覇潤「中国化論序説——日本近現代史への一解釈」『愛知県立大学文学部論集』57号（日本文化学科編11号）、pp. 21-73、2009年3月（査読無）。

②與那覇潤「無縁論の空転——網野善彦はいかに誤読されたか」『東洋文化』89号（東京大学東洋文化研究所）、pp. 217-260、2009年3月（査読有）。

③與那覇潤「小津安二郎と昭和史の方法——中国化論補章」『愛知県立大学日本文化学科論集』1号（歴史文化学科編）、pp. 41-83、2010年3月（査読無）。

④與那覇潤「中国化する公共圏？——東アジア史から見た市民社会論」『法政研究』77巻1号（九州大学法学部）、2010年夏予定（査読無、入稿・掲載決定済）。

⑤與那覇潤「小津安二郎と体験史の方法——中国大陸で見た画面と戦場」『歴史の理論と教育』2009年度大会特集号（名古屋歴史科学研究会）、2010年秋予定（査読無、入稿・掲載決定済）。

〔学会発表〕（計 4 件）

①與那覇潤「小津安二郎と戦後史の方法——『植民地』の痕跡を中心に」名古屋歴史科学

研究会第5回大会、名古屋大学、2009年5月30日。

②與那覇潤「ふたつの『革命』のはざままで——沖繩から見た辛亥革命と大正政変」第8回日本・韓国政治思想学会国際学術会議「伝統と革命、政治思想の課題と挑戦」、立教大学、2009年7月4日。

③與那覇潤「中国化する公共圏？——東アジア史から見た市民社会論」第2回アジア市民社会公開シンポジウム「北東アジアにおける市民社会の展開」、九州大学、2009年11月3日。

④與那覇潤「異形の君権——江戸時代はいかなる『近世』か」歴史学研究会近世史部会（池田勇太氏支援報告）、東京大学、2010年2月28日。

〔図書〕（計 1 件）

①坂野徹・慎蒼健（編）『帝国の視角／死角——〈昭和期〉日本の知とメディア（仮）』青弓社、2010年秋予定（入稿・掲載決定済）

※與那覇潤「小津安二郎と帝国史の方法——ひとつの（反）ポストコロニアル批評」を寄稿。

その他、刊行時期未定のため本報告書には掲載を見送ったが、原稿入稿済の論文集3点あり。

〔産業財産権〕

○出願状況（計 0 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計 0 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等
なし

6. 研究組織

(1) 研究代表者

與那覇 潤 (YONAHA Jun)

愛知県立大学・日本文化学部・准教授

研究者番号：50468237

(2) 研究分担者

なし ()

研究者番号：

(3) 連携研究者

なし ()

研究者番号：